

養鶏養豚経営の新しい考え方

前回、先ず足もの現況をよく見定めておく必要がある。わが国の養鶏養豚は、地域的に見ても、普及度の高い部門に属するものであるが、飼育技術、管理面において、従来きわめて非能率的な経営を行ない、一戸当たりの飼育頭羽数も一〇羽以下という状態であった。

しかし、ここ数年の傾向を見るところ、鶏では昭和三〇年は約四、五七〇万羽であるが、昭和三七年には約八、九九〇万羽となり、七年間に約二倍増となっている。一方、飼養農家一戸当たりの頭数を見ると、昭和三〇年は約一〇羽であったのが、昭和三七年には約二四羽となつたのが、昭和三七年には約二四羽となつてある。つまり、飼養農家は頭打ち、むしろ減少の傾向を辿り、飼育頭羽数のみが増加し、いわゆる多頭羽飼育の方向に進んでい

新しい養鶏養豚の姿をえがきだす前に、先ず足もの現況をよく見定めておく必要がある。わが国の養鶏養豚は、地域的に見ても、普及度の高い部門に属するものであるが、飼育技術、管理面において、従来きわめて非能率的な経営を行ない、一戸当たりの飼育頭羽数も一〇羽以下といふ状態であった。

しかし、ここ数年の傾向を見るところ、鶏では昭和三〇年は約四、五七〇万頭で約五倍、飼養農家一戸当たりの頭数は昭和三〇年の一・四頭に対し、四・〇頭とこれも多頭飼育の傾向を示している。

農業構造改善事業と多頭羽飼育

農業基本法でえがく将来の畜産の青写真によると、昭和四十五年度には、少なくとも現在の三倍以上を目指している。なるほど卵や肉の消費増からみると、生長材の畜産の中でも養鶏養豚は特に時代の波に乗った花形である。しかし実際に生産する農家側からみると、今直ぐに惚れこむ相手でもないのか、多頭羽飼育に積極的に踏みきる熱意が余り見られない。これは鶏豚は有望ではあるが、それほど儲けがないという切実な気持が停滞しているからであって、何

か強い刺激剤を与えない限り、従来の畜産名のもとにこれから広く普及するものと思

現況

豚も鶏と似た傾向を辿り、昭和三〇年に約八万頭が昭和三十七年には、約四〇〇〇万頭で約五倍、飼養農家一戸当たりの頭数は昭和三〇年の一・四頭に対し、四・〇頭とこれも多頭飼育の傾向を示している。

将来の農家養鶏養豚の方向

わが国の中小家畜は、まだほんの副業的範囲で貧弱であるが、農業經營を支える手足の役目を果たすには少なくとも養鶏で三〇〇羽以上、養豚では五〇頭以上が經濟的な經營単位である。この考え方の根拠とするところは、現在自立農家の所得目標を七〇〇円に置いているが、その内の二〇%位を畜産収入に依存することになると、前に述べた頭羽数がどうしても必要となるし、

○〇〇羽になればケージが有利で、しかも単頭羽飼育の離型配列がよい。所得一羽一ヶ年の所得(労賃を差引かない利益)を五〇〇円、これは廃鶏、鶏糞収入が見込まれている。

管理様式 三〇〇羽になればケージが有利で、しかも単頭羽飼育の離型配列がよい。所得一羽一ヶ年の所得(労賃を差引かない利益)を五〇〇円、これは廃鶏、鶏糞収入が見込まれている。

三〇〇羽養鶏の經營基準

施設 施設の投資をなるだけ軽くするため、鶏舎は自家用材を利用した丸太掘立のビニールハウスとする。自家用材のない場合は鉄骨を考慮する。坪当たり飼育羽数二五〇羽、肉豚なら五〇頭が經營有利導く最低数のようである。これは今迄の常識からみると、甚だしく大規模な經營であるが、これがいわゆる農家養鶏や農家養豚の家なるが故に二〇% (風乾) 位の自給率を予想し一日三円五〇銭を見込む。

労力、飼育羽数からみて、年間七三〇時間、一日平均二時間を見込む。

飼料 完全配合飼料を主体とするが、農家なるが故に二〇% (風乾) 位の自給率を予想し一日三円五〇銭を見込む。

北海道農業改良課・畜産専門技術員

早川晋八



の枠から多頭羽飼育に飛躍出来ないでもついていたのであるが、ちょうどよく登場して来たのが農業構造改善事業である。この事業に養鶏なり養豚なりがもしとり入れた場合は、畜産の主産地として発展するのに必要な基盤が整えられ、一人前の企業畜産の方向が授けられるわけである。例えば

養鶏の主産地になるには将来約一〇〇万羽の

集団養鶏地になる見込があり、共同育雛所、

生産物の集出荷施設、養鶏センター等の共

同施設のほかに、数人が集合した協業經營

による大規模飼育、個人鶏舎等の必要施設

を整備することが必要で、これに必要な資

金が一町村当一億数千万円テコ入れされ

わけである。既に昨年構造改善の実施地区

にはいった市町村は全国で一二〇カ所で、

その内の二〇%が養鶏を基幹作目の一つに

採り入れている。

しかしここで考え直してもらいたいの

は、今後多頭羽飼育に向かうことが、どん

な場合にも有利だと、あたかも万能薬のご

とく考えるのは大きな誤りで、一部の農家

は相変わらず今迄通りの貧弱な副業畜産に

留まつても不合理ではない。即ち農場では

無価値に近い資材や残渣物を利用して、ち

ょうど飼い得る範囲の豚や鶏からは、そ

の生産量は僅かであるが、原価の最も安い卵

や肉を得られるからである。つまり農家の

生活改善に役立たせる程度に於て合理性が

あるのみである。

しかしここで考え直してもらいたいの

は、今後多頭羽飼育に向かうことが、どん

な場合にも有利だと、あたかも万能薬のご

とく考えるのは大きな誤りで、一部の農家

は相変わらず今迄通りの貧弱な副業畜産に

留まつても不合理ではない。即ち農場では

無価値に近い資材や残渣物を利用して、ち

ょうど飼い得る範囲の豚や鶏からは、そ

の生産量は僅かであるが、原価の最も安い卵

や肉を得られるからである。つまり農家の

生活改善に役立たせる程度に於て合理性が

あるのみである。

年間産卵率 技術的な水準が進むまでは
稍々低目の六五%に留めておく。

更新率 年間八〇%、初産後満一年の

淘汰率五〇%、一カ年半で全群処分。年三

回補充。

卵価 一キロ一八〇円（一個一〇円）五カ

年平均。

育雛事業

初産開始までの育成費は育成

率を八〇%として一羽六〇〇円を見積る。

育雛器は各自用意。

以上述べた経営の各要素はお互に関連を持て結合しているから、どこか一カ所の成績を良くするには、それに関係した要素に手を加えねばならない。例えば産卵率を引き上げるために更新率や飼料費の引き上げが必要となる。

年間出荷五〇頭肉豚経営基準

管理様式 労力、衛生管理、保温の面からデンマーク式が合理的である。

素豚の確保 常に格安で、良質な素豚を手に入れるには、今のところ自分で繁殖豚を持ち子豚を自給する他はない。仔豚価格

三、〇〇〇円。

所得 肉豚一頭、半カ年三、〇〇〇円、これには豚糞四〇〇円を見込む。

施設 多頭飼育になるほど、建物が破損し易く、舎内が不衛生に陥りやすいのが豚舎の特色であるから、頑丈な施設にする必要がある。そのためには床コンクリート腰壁のデンマーク式豚舎がよい。肉豚一頭当たり〇・四坪。

労力 飼料の調製や自給割合で大幅に異

なるが、一頭、半カ年間二〇時間を見込むと年間全群一、〇〇〇時間となる。

飼料 完全配合飼料を主体とするが、夏

は牧草、冬は馬鈴薯、澱粉粕利用で総体の三〇%（風乾比）を自給する。飼料費を一頭当たり八、五〇〇円以内、飼料一キロ約二八円。

肥育能力 離乳後より九〇%に肥育する

期間を五ヵ月とし、一日の増体量五〇〇均

を見込む。

肉豚価格 生体一〇〇匁六〇円以上、九

〇%の肉豚では一万四、四〇〇円となる。

以上は各経営要素の数字について一点を示しているのみで、これが絶えず変動している。豚は特に価格変動が激しいから経営として安定しにくい。

新しい技術革新

畜産の方は農業や機械の部門のような日進月歩のはなやかさはないが、最近問題になり一般の関心を集めている新しい技術について、既に知れ渡っているものもあるうが、更に補足してみよう。

ランドレース一代雑種の利用価値

薄脂肪豚でしかも発育の速い豚として注目されているが、本道では新得畜産試験場

や石狩畜連から一部成績が発表されている。もともとランドレースは穀物主体の高

乳後九〇%の肉豚に仕上げるのに僅か一二

〇日の短期肥育で、飼料効率もすばらしく

よく、一キロ増体するのに三・〇%の飼料足り、しかも背脂肪が薄いという一見して結構くぬめの豚であるが、馬鈴薯や澱粉粕、牧草と言った繊維の多いものを多給する飼料

事情のところへ入れて、果たしてランドレ

ースの持味である速やかな発育やすべきな

飼料効率をどの程度迄期待してよいやら、あるいは短期肥育で注文通りの薄脂肪の豚の仕上げに成功しても、肉質が我々の舌に適合するか、今後研究すべき問題点が残されている。これから急速に増産態勢に入る一代雑種に対しても、同じ疑惑が持たれる

から、単に時代の流行とか人気の勢に盲目にならないで、常に疑問点と其の解決策を

念頭に置きながら、この新米のお客を迎えるべきである。

豚の人工乳の利用

すでに一般に普及しているが、人工乳の本来の使命である早期離乳に用いないで、自然哺乳の補助飼料として利用されている。それは早期離乳は宣伝ほど成績がよくない、まだ危険だという見方が強いからである。飼料化学の進歩で人工乳の実用化の範囲が高められ、乳牛の方では赤坊時代から人工乳のみの育成法が既に完成されている。豚の方も、もっと活発に利用したいものである。特に寒冷地では寒さのため分娩適期が制限されているから、哺乳期間を短くくりあげると、適期分娩に非常に好都合になつて来る。また農家の繁殖豚は一般に小型で、子豚の哺乳頭数が多い場合は母体の消耗が大きく、これが繁殖寿命を短くしている。早期離乳の方法には早晚いろいろあるが、一般的で無難なのは一ヶ月目離乳であろう。しかしこれは本当の意味での早期離乳に入れられない。新得畜産試験場の成績では三週間が好成績をあげている。飼育頭数が僅かで飼料費が安い所で、しかも

離乳後九〇%の肉豚に仕上げるのに僅か二

〇日の短期肥育で、飼料効率もすばらしく

よく、一キロ増体するのに三・〇%の飼料足り、しかも背脂肪が薄いという一見して結構くぬめの豚であるが、馬鈴薯や澱粉粕、牧草と言った繊維の多いものを多給する飼料

事情のところへ入れて、果たしてランドレ

ースの持味である速やかな発育やすべきな

輸入雑の利用

最近わが国の養鶏界に一大波乱を起した

のは米国雑の大規模輸入である。外国物なら何でも飛びつく悪い癖も手伝つてはいよう

が、日本の養鶏の盲點を狙つての侵攻作戦

であるから頭を抱えざるを得ない深刻な問

題である。というわけは、日本鶏は能力は良

いが、弱く損耗が多いのに、輸入雑は強健で

病気がなく損耗率が低いので、稼働率が高く

総体的に産卵箇数が多くなり経済性が高

くなる。例えばカリフォルニアの二二ヵ所

代表的種鶏農場の経済検定試験をみよう。

この試験法は各農場から五〇~一〇〇羽の

雛群を良否を意識した選抜でなく、何処か

らでも自由にとり約一・五年同一飼育を施

し、その間の斃死率、産卵数について調査

する。

即ち約一・五年の斃死率は七・一%、産卵

数二八六箇（卵重五五g）で約七〇%の産

卵率である。これをわが国の一般養鶏家の

成績に比較すると、産卵率は全然淘汰しな

いで、これだけの成績をあげているのは個

体能力が秀れているというよりも凸凹なく

平均化されているところに注目したい。さ

らに斃死率が育成期半年、産卵期一ヵ年を

通じて七・一%の僅少に留まっているのは、

鶏群が無病な健康鶏の集合であることが窺

われる。

今日本の最も望まれるのは病氣のない

健康な雛である。それほど白血病その他の

より鶏の損耗が大きいからである。しかし、

わが国でも米国雑に負けない強健な雛の生

産に自信のある人もいるが、根本問題であ

る耐病性雛の作成とか、白血病等の防疫対

策には未だ確立されたものがない悩みがあ

る。従つてここ当分の間、輸入雑の割込が

続くことと思われる。